

## 臨床実習に影響を与える性格的特性分析

常葉学園静岡リハビリテーション専門学校  
堀本 ゆかり

### 1. はじめに

本来専門学校に入学してくる学生は、基本的に「将来理学療法士になる」という目標をもって入学してくる。しかしながら、入学後、意欲の低下や態度が問題となる学生が増加している。ゆとり教育の影響を示唆する意見も多いが、なおさら学生の気質に合わせた教育方法論が必要となる。医療の質を低下させないために、一定の要件に満たない学生はどんどん落とすという考え方もある一方、学校の経営的問題もある。教員の教授能力により、この線引は大きく影響を受けると言っても過言ではない。内山らは「教育は、教職員－学生との関係とともに教育課程や学習支援環境を含めたシステムが重要である。これまでは学生数が少なかったこともあり、学生時代に受けた恩恵を後輩に伝承していく手作りの徒弟的な教育方法が可能であった。しかし、学生数の急増、学生気質の変化、拡大する業務に加え、養成施設の増加によって、これまで臨床現場で教育を担ってきた理学療法士の一部が教員として教育現場に移動したことなどから、臨床教育とその基礎となる学内実習教育における基本的臨床技能の習得方法の見直しが急務となっている。」と述べている。

そこで、兼ねてから研究を継続している学生の性格的側面に着目し、コーチング技法が取り入れられるか検討を行った。

### 2・本研究の背景

15歳を対象にしたOECDによる国際的な生徒の学習到達度調査では、科学的リテラシー、読解力、数学的リテラシーのどの分野においても日本は大きく成績を下げている。研究報告でも平成17年頃より、入学生の学力低下が著しく、計算や分数、辞書の使い方がわからない学生が増加しているとの報告があった。本校でも同様の傾向を示している。全国私立リハビリテーション学校協会の研究報告をみても、養成校はどれも学生の学力の低下に対応すべく指導力の強化に力を入れている。

専門学校教育の要となる即戦力に見合う専門職教育は、臨床能力向上を目標とし、一般的にはベンジャミン・ブルーム(1956)が提唱した教育目標の分類体系(taxonomy of educational objectives)である認知領域・情意領域・精神運動領域の3分類にそって展開される。学内で実施される定期試験と各学年の臨床実習の成績により判断されるが、学内成績では学習が成果に結び付かない学生が多くみられるようになってきたこと、臨床実習では指導力が不十分な若い臨床実習指導者の増加、評価基準のばらつきなど課題が山積しているのが現状である。

### 3. 理学療法士養成校のカリキュラム

理学療法士は3年ないし4年の養成校での卒業をもって、国家試験受験が保障される。この期間内に学生は基礎領域・専門基礎領域・専門領域に分類された科目を受講し、厚生労働省の指定規則では、18単位(810時間)以上の臨床実習(臨床教育)が必要とされている。学内での履修内容は、1年生では教養科目のほか解剖学・生理学・心理学等の基礎医学、2年生では小児から高齢者の運動学および疾患の理解、また、理学療法評価法について学ぶ。3年生では具体的な理学療法治療法、4年生では卒業論文と国家試験に向けての学習となる。臨床実習は1・2年生の見学・体験実習、3年生の評価実習、4年生では治療を主体とした2ヶ月間の臨床実習を2回行い、このすべてのカリキュラムに対して合格した者が、国家試験受験となる。対象疾患は多岐にわたるため、ジェネラリスト的な知識と技術が求められる。

### 2. 対象と方法

対象は、4年制専門学校に在籍する1～3年生166名である。内訳は、1年生49名(男子29名・

女子 20 名・平均年齢 19.8±5.3 歳)、2 年生 44 名 (男子 23 名・女子 21 名・平均年齢 20.5±3.3 歳)、3 年生 73 名 (男子 47 名・女子 26 名・平均年齢 21.3±2.3 歳) である。4 年生については、カリキュラム上臨床実習と卒業論文、国家試験対策が主体となるため、今回の解析対象からは除外した。なお、対象者に関しては、本学の倫理規定およびヘルシンキ宣言に則り、趣旨を説明し同意を得た後、調査を開始した。また、個人情報の管理には十分に配慮をした。

方法は以下のとおりである。まず、質問紙による心理検査を実施した。調査内容は学生の生活様式に関する質問紙、PRESIDENT 版「ビッグファイブ」性格シート、気分を評価する POMS (Profile of Mood States) 短縮版、コーチングに基づく行動のチェック表の 4 種類である。また、学力の指標は平成 22 年前期定期試験の総合得点を参考にした。また、各クラスの担任により生活態度や成績を鑑み、不安要素のある学生 37 名を臨床実習不安あり群、それ以外を臨床実習不安なし群に分類した。なお、それぞれの調査は、1 年生の学内への適応が見られ始め、前期試験結果が公表される前の 9 月上旬とした。

PRESIDENT 版「ビッグファイブ」は、従来の「類型論」つまり「タイプ分け」と一線を画し、5 つの特性を列挙しながら性格を分析していく「特性論」である。PRESIDENT 版はかねてからの臨床モデルと異なり産業モデルとして提案された質問紙を使用した。POMS 短縮版に関しては気分を評価する指標として McNair らにより米国で開発され、対象者がおかれた条件により変化する一時的な気分、感情の状態を測定する指標である。分類に関しては、評価基準に則り、緊張・抑うつ・怒り・疲労・混乱の各項目に対して T 得点が 60 点以上のものがあるものをグレーゾーン、75 点以上のものは要注意とし、活力に関しては 40 点以下のものを要注意とした。コーチングに基づくチェック表は、鱸らの文献より引用した。

#### 4. 解析

調査項目は、多変量連関図でモニタリングを行い、基本統計量を確認した。今回解析対象とした PRESIDENT 版「ビッグファイブ」性格シート、POMS 短縮版、コーチングに基づく行動のチェック表の調査項目はいずれもひずみ、とがりとも絶対値で 1.5 以内であった。

##### ① PRESIDENT 版「ビッグファイブ」性格シートの結果

各学年のデータを主成分分析で解析した。各学年とも第 3 主成分までの累積寄与率は 0.8 以上ありよくあてはまっている。傾向としては、5 つの特性のうち神経症傾向だけがその他の変数と離れた位置にある。固有ベクトルでも第 1 主成分では神経症傾向がマイナスに位置している。主成分得点で確認すると、この象限に位置するものは、担任が臨床実習に対して不安を感じている学生と一致していた。

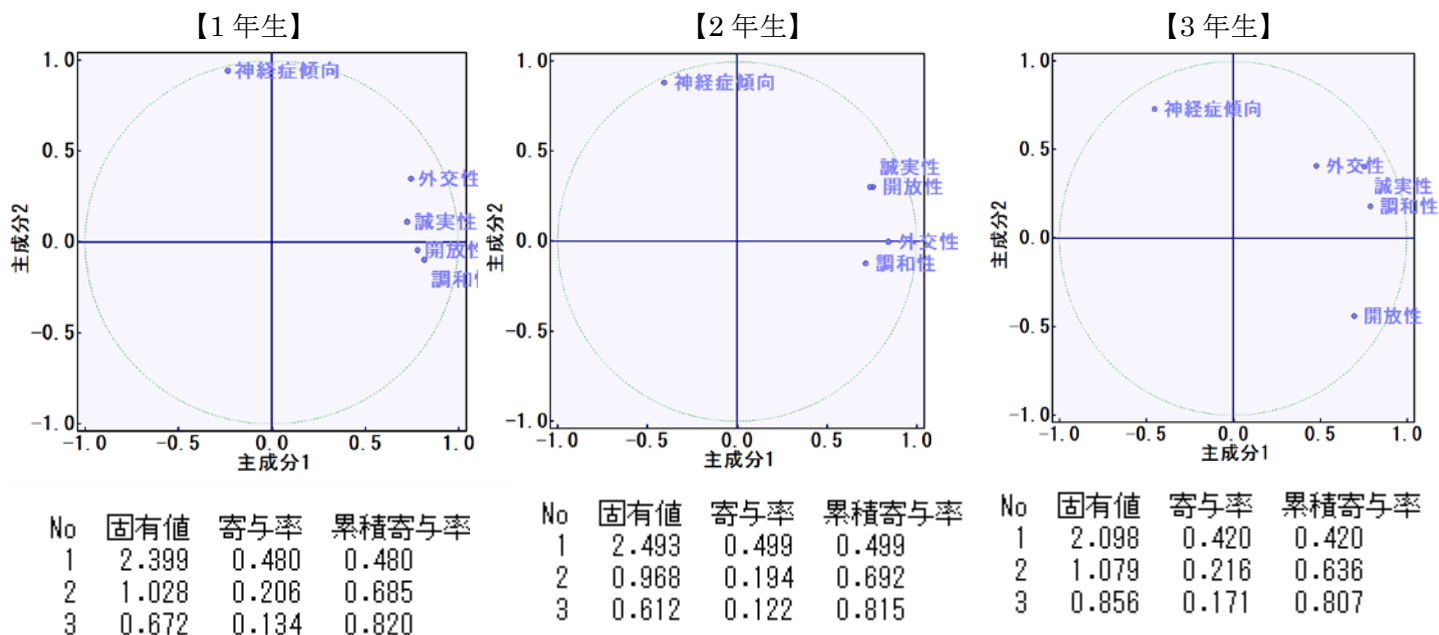


図-1 各学年 因子負荷量散布図

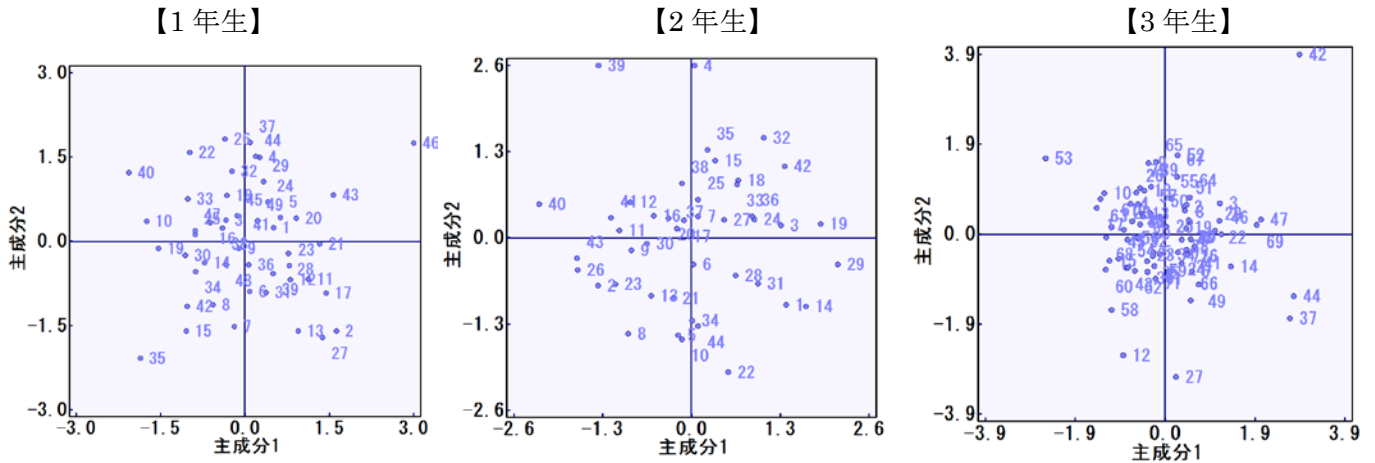


図-2 各学年 主成分得点

表-1 各学年固有ベクトル

	1年生			2年生			3年生		
	主成分1	主成分2	主成分3	主成分1	主成分2	主成分3	主成分1	主成分2	主成分3
神経症傾向	-0.257	0.893	0.232	-0.152	0.927	-0.03	-0.313	0.7	-0.309
外交性	0.532	-0.004	-0.343	0.479	0.343	-0.216	0.329	0.39	0.817
開放性	0.479	0.304	-0.257	0.503	-0.046	-0.598	0.478	-0.424	-0.08
調和性	0.452	-0.128	0.871	0.525	-0.096	0.078	0.544	0.17	-0.454
誠実性	0.467	0.307	-0.061	0.467	0.107	0.767	0.519	0.386	-0.155

②POMS 短縮版

次に、PRESIDENT 版「ビッグファイブ」で抽出された「神経症傾向」の学生が学生の気分によりに影響するか調べる。まず、各学年の POMS の傾向を図-3に示す。1ヶ月間の臨床評価実習を控えた3年生は緊張や混乱が高い傾向にある。

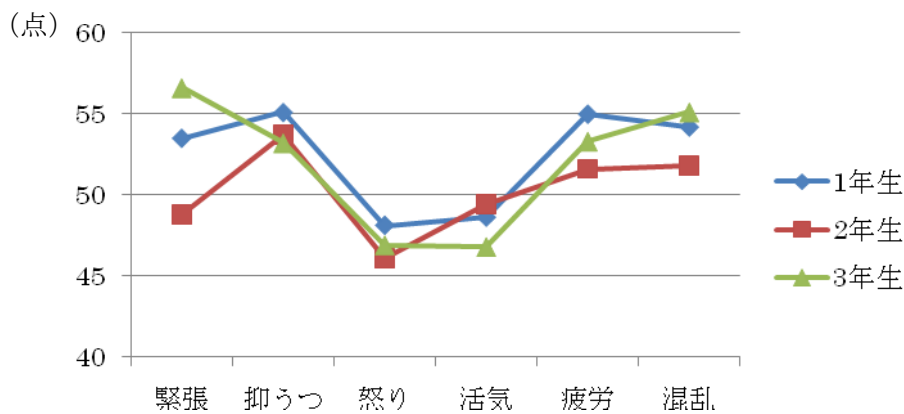


図-3 各学年 POMS 評価 ①

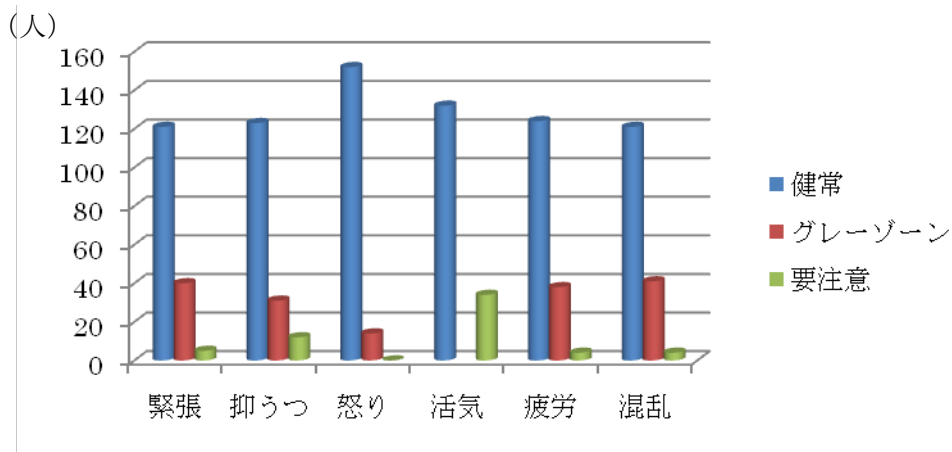


図-4 傾向別 POMS 評価

また、図-4では、緊張・抑うつ・疲労・混乱は、グレーゾーンを示す学生が多い傾向である。特に抑うつは75点以上の高値を示す要注意者が多い傾向を示している。一方、活気の低下を示す学生にも注意が必要である。

そこで、「神経症傾向」を示す学生の気分に対して、POMS の各因子のうち注目すべき項目を抽出する目的で、数量化I類を行う。

表-2 数量化I類 変数選択

目的変数名	残差平方和	重相関係数	寄与率R <sup>2</sup>	R* <sup>2</sup>	
神経症傾向	1943.018	0.566	0.321	<b>0.308</b>	
	R** <sup>2</sup>	残差自由度	残差標準偏差		
	0.296	161	3.474		
vNo	説明変数名	残差平方和	変化量	分散比	偏回帰係数
0	定数項	2062.401	119.383	9.8922	6.815
10	緊張	2266.962	323.944	26.8422	0.157
<b>11</b>	<b>抑うつ</b>	2002.127	59.109	4.8978	<b>0.063</b>
12	怒り	1940.931	-2.087	0.1721	+
13	活気	2113.254	170.236	14.1058	-0.106
14	疲労	1930.417	-12.602	1.0445	-
15	混乱	1942.779	-0.240	0.0197	+

重相関係数は0.566とあまり高くはないが、緊張・抑うつ・活気の3項目が選ばれた。特に緊張は分散比が大きく「神経症傾向」大きく関与している事がわかる。また、マイナス方向となっている活気のなさについても注意すべきであることが伺える。

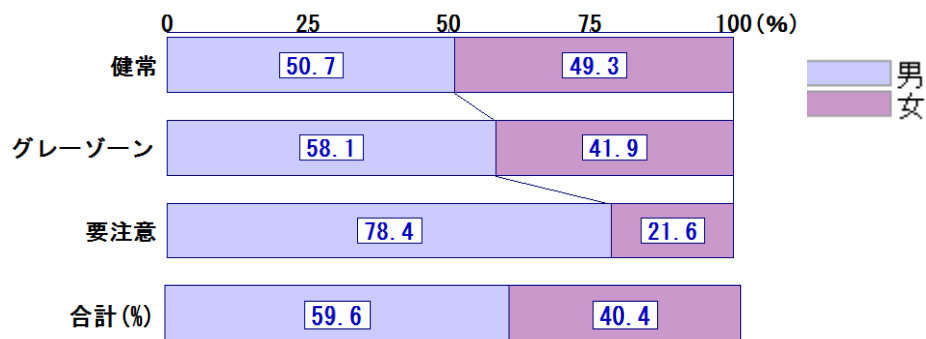


図-5 各分類の男女差

また、図-5に示す通り、POMS T得点がグレーゾーンから要注意になるに従い、男子の比率が大きくなるのがわかる。実際、臨床実習で問題を指摘されたり、途中で断念せざるを得ない学生は年々

男子が増加しており、留年する学生の70%以上が男子である。特に6項目のいずれかのうち要注意エリアに位置するものは、他の項目のいずれかが要注意やグレーゾーンにある傾向が強く、担任教員も臨床実習に対して不安を感じている。

③コーチングに基づく行動のチェック表

次に、コーチングに基づく行動のチェック表について、傾向をみる。分類されたタイプは以下の4つである。

- ①人や物事を支配していくことが得意なコントローラータイプ
- ②人や物事を促進していくことが得意なプロモータータイプ
- ③分析や戦略立案に長けているアナライザータイプ
- ④全体を支持していくことにやりがいを感じるサポータータイプ

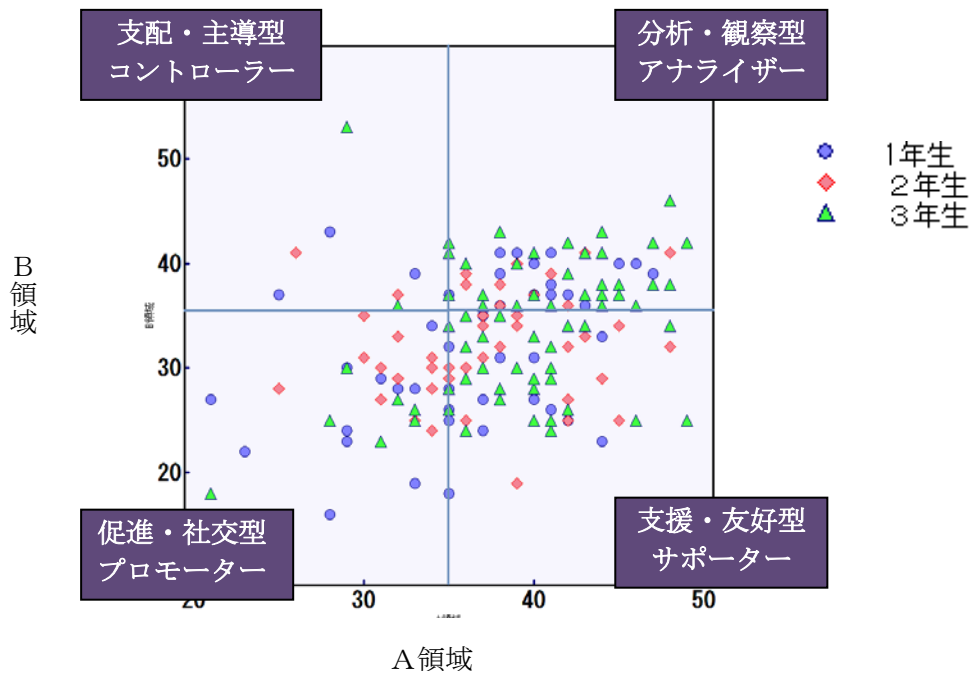


図-6 コーチングに基づくタイプ別分類

本校の学生は分析・観察型（アナライザー）と支援・友好型（サポーター）が多い傾向がある。

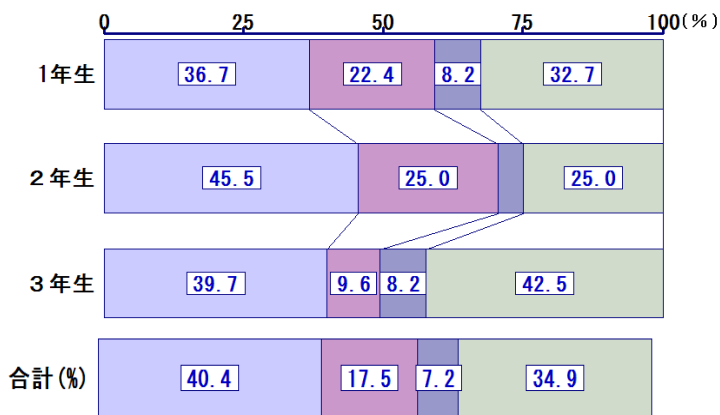


図-7 学年別タイプ別分類

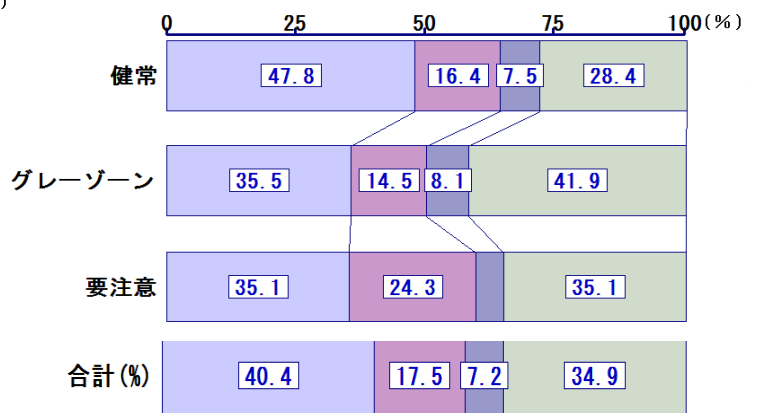
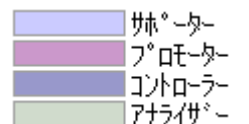
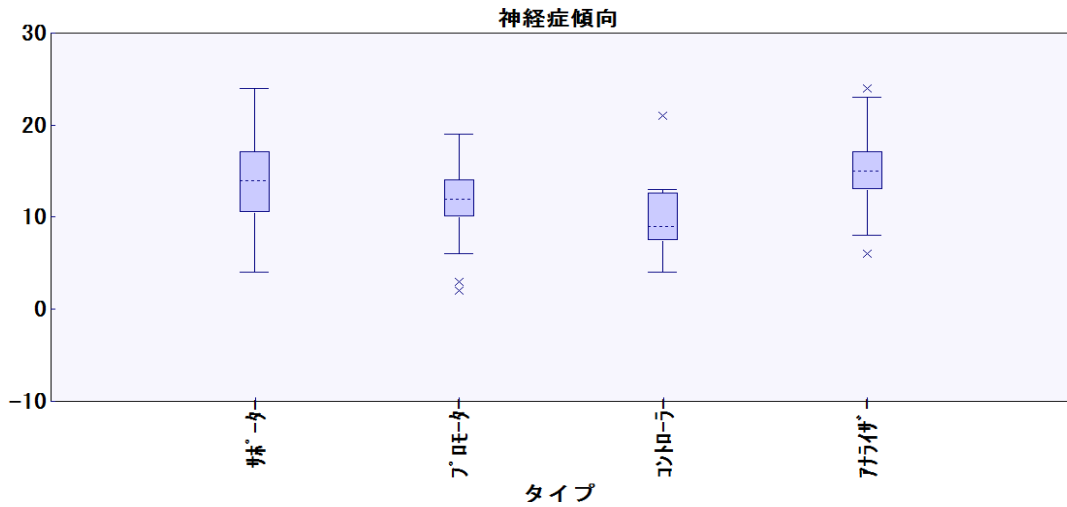


図-8 POMS との対比



学年別では、高学年ほどこの傾向が顕著となる。しかし、POMS との対比をみてもグレーゾーン、要注意となるに従い、アナライザータイプが増加しているのがわかる。



カテゴリ名	刺激型	プロモーター	コントローラー	アナライザー
刺激型		0.056	0.032*	0.128
プロモーター	0.816		0.432	0.001**
コントローラー	0.225	0.216		0.026*
アナライザー	0.097	0.272	0.025*	

表右上:「平均値の差の検定」P値(両側)(t分布,両側検定)  
 表左下:「等分散の検定」P値(2\*上側)(F分布,両側検定)  
 \*\*:1%有意,\*:5%有意

図-9 神経症傾向とコーチングタイプとの関連

神経症傾向のコーチングタイプでは、特に分析・観察型(アナライザー)と他の群とに差があった。これまでの結果による大まかな相互関係図を作成すると、図-10のようになる。

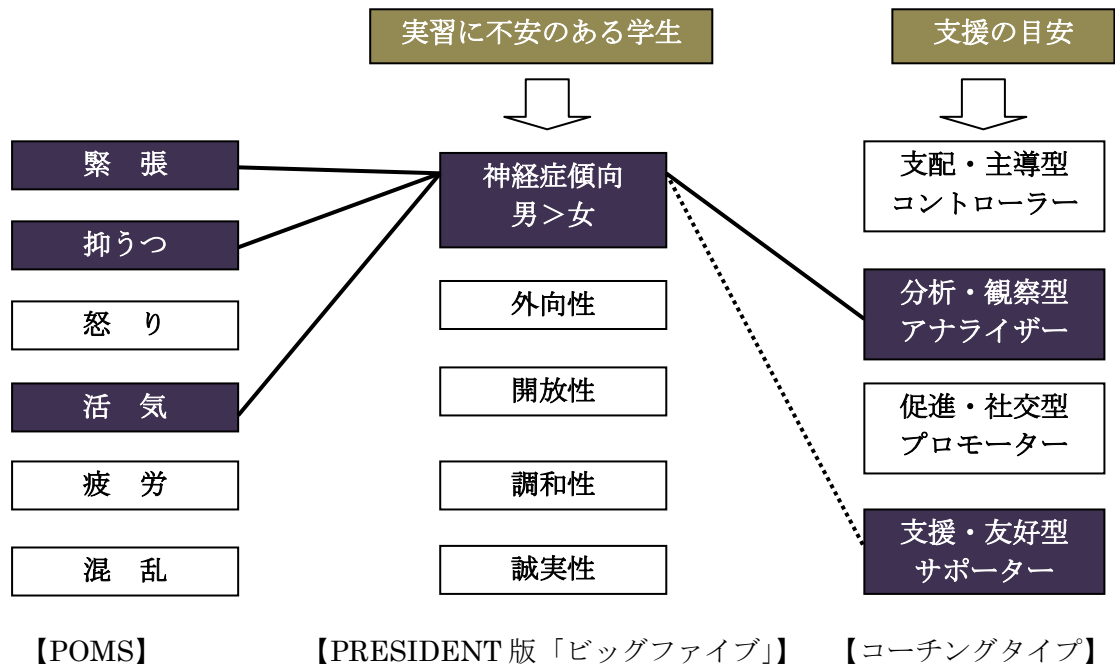


図-10 相互関係図

PRESIDENT 版「ビッグファイブ」は生来の性格、POMS は日常の気分指標を反映している。これらの情報に該当するコーチングタイプを踏まえ、コーチング手法に基づいた指導を行っていく。これらの変数間同士の関係性を再度、グラフィカルモデリングを用いて連鎖独立グラフを作成した。モデルの適合度は  $p = 0.0739$  であった。

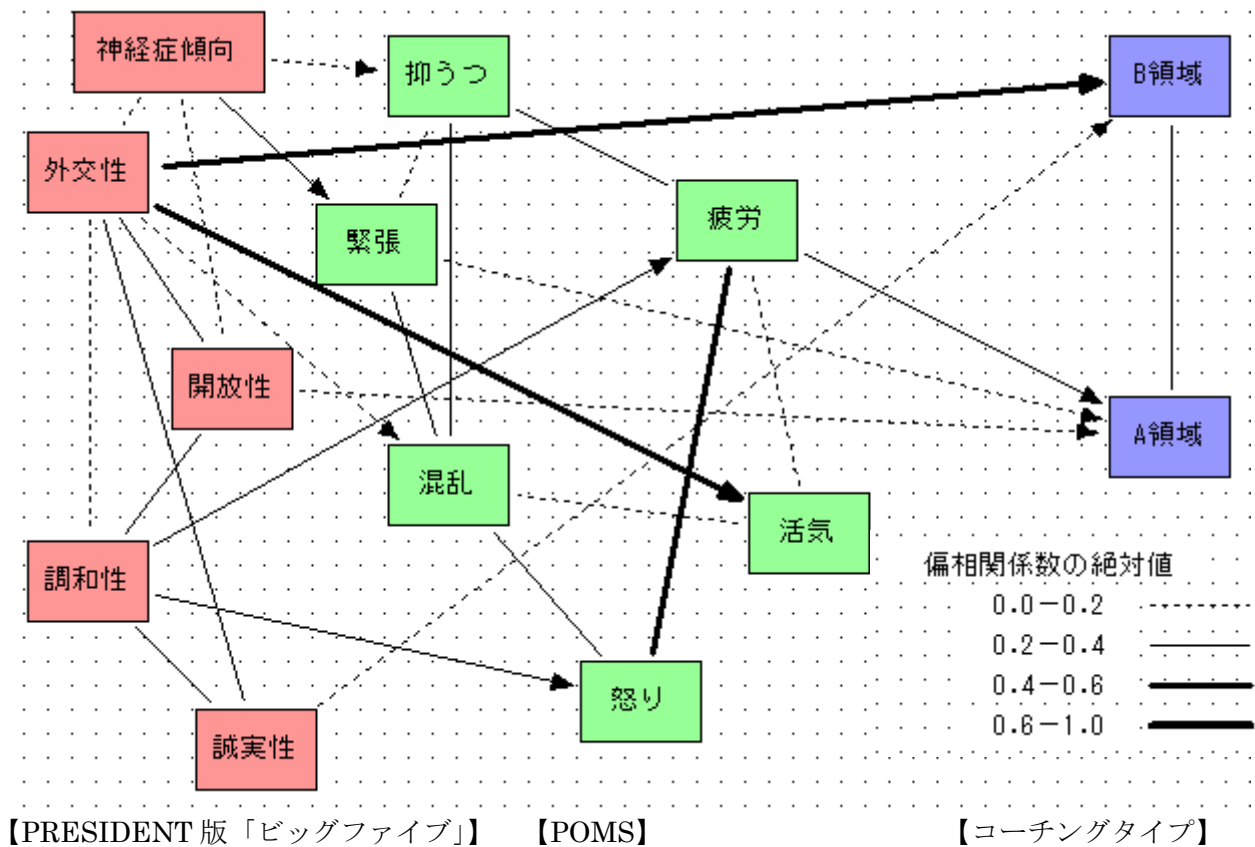


図-11 GM連鎖独立グラフ

注目していた「神経症傾向」の学生は、抑うつ・緊張に矢印がのび、最終的にはコーチングタイプのA領域に影響しており、「外交性」は活気とB領域に影響を与えていた。

## 5. 考察

以前、ゴールドバーグの性格判定と学生の性格の結果より、担任の学生をみる判断は高い相関関係が認められた。今回、臨床実習にあたり不安要素のある学生をピックアップし、性格的特性を分析した、その結果、PRESIDENT 版「ビッグファイブ」で神経症傾向に分類される学生は不安要素が強い傾向を認め、さらに日常的な気分特性では「緊張」「抑うつ」が高く、「活気」の値が低い学生がこれにあたり、さらにコーチングタイプでは「分析・観察型(アナライザー)」タイプの学生がこれに該当した。

神経症傾向では、少しでも困難な仕事を前にすると、すぐに緊張し、不安に駆られる。ちょっとした挫折でも意気消沈し、孤立していると思込んでしまう傾向が強くなる。他人と話をしている時、何を話したらよいかわからなくなり、相手が自分をどのように思っているのか、大変気になってしまうことが多く、ストレスをため込んでいく。失敗し思い通りにいかないと、そのことに対する思いをコントロールできなくなり、さらに失敗を重ねる傾向が強くなる。また、「分析・観察型(アナライザー)」タイプの学生は、行動は慎重で計画を立て、分析をする完璧主義者が多い傾向である。失敗す

ることに恐れがあり、変化や混乱に弱い。このタイプは過去の経験や情報を大切にするため、十分な情報がないと行動に移すことができず、大きな変化を強いるとプレッシャーになってしまう。このような特性を踏まえつつ関わりをもつと同時に、GM で示された「外交性」に注目する。5 因子のうち「外交性」に関しては、その後の人とのかかわりにより変化を期待できる可能性を含んでいる。性格に関してはそれまでの成育歴に大きな影響を持つが、社会的交流を深め経験値をあげることで対人面のトレーニングとして機能する可能性を含んでいる。

米国企業では実際に人事アセスメントに「特性論」である「ビッグファイブ」を活用し、その科学的根拠も検証済みとのことである。例えば、バリックとマウントは「ビッグファイブ」各因子と仕事上の関連性をメタ分析した結果、「誠実性」は管理職・営業職・専門職・熟練工・警察官など「外向性」は管理職・営業職多くの職業で成果と相関関係があると報告されている。

日経新聞等の記事によると、大学入学から卒業までの中退率は12.1%、8人に1人が大学になじみず中退する傾向があると報告されている。受身でよかった高校生活に比べ、大学では自律性・自立性が求められる。本校のような卒業後の進路が明確な専門学校でさえ同様である。特に、患者や現場の指導者と対峙する臨床実習では、学生の性格的特性が大きく影響するものと思われる。

学内教育では入学後早期にその性格的特性を把握し、見合ったコーチング技法によりサポートしていく事が望まれる。特に、今回クローズアップされた分析・観察型(アナライザー)タイプの学生は感情表現が苦手な特性があるため、内面的なストレスを見極め、十分な情報と時間を与えて行動変容を促すよう心がけることが重要であると考え。彼らが得意とする分析力と粘り強さを引き出し「活力」を向上させていくよう心がける。成功体験と安心感を得られるような援助が望ましい。

組織的には高等学校教育から専門学校への移行に対する支援や「社会力」の構築が必要であろう。入学後も、卒後教育も視野に入れ、1年次からの段階的目標設定と学びの支援が必要となる。さらに、多様化する学生の性格特性を支援するためFD教育も視野に入れ、教員の授業力の向上も課題である。また、理学療法士教育のもう一つの柱である臨床実習者の教育力向上も急務である。急激な理学療法士の増加は、臨床実習指導者の低年齢化を招いている。スーパーバイザー、スーパーバイジー双方が経験が少ない現場では、カリキュラムの進捗が滞り、学生の失意のみが大きくなる。その場合、学生側は進捗が滞っている本質の理解もできないまま心理的ストレスを増大させる。学校から臨床実習施設に発信する情報は、学生の臨床実習教育に対してプラス要因として機能する必要がある。未熟な学生を成長させる技術をさらに向上させなければ、結局として医療業界の質の低下を招いてしまう。今後、この結果を踏まえ、コンピテンシー診断を加味した学内教育の充実、臨床実習評価表の改善と臨床実習指導者教育に貢献したいと考える。

## 6. 参考文献

- 1) 新田収・他：理学療法スーパーバイズマニュアル 臨床実習生・新人理学療法士指導のために。指導の要点 101-131. 南江堂. 2010.
- 2) 奈良勲：理学療法教育論。臨床実習の意義 147-159. 医師薬出版. 2004.
- 3) 松下信武：ビッグファイブ理論タイプ別付き合い方のコツ. PRESIDENT. 45 (15). 61-65.2007.
- 4) 出江紳一：コーチング活用ガイド. 医師薬出版. 2009.
- 5) 鱸信子・他：ナースのためのセルフコーチング. 株式会社 医学書院. 2010.
- 6) JUSE-StatWorks/V4.0 SEM 因果分析編ユーザーズマニュアル
- 7) 手法マスターコース StatWorks による構造方程式モデリング (SEM) 入門コーステキスト



掲載されている著作物の著作権については，制作した当事者に帰属します．

著作者の許可なく営利・非営利・イントラネットを問わず，本著作物の複製・転用・販売等を禁止します．

所属および役職等は，公開当時のものです．

■公開資料ページ

弊社ウェブページで各種資料をご覧ください <http://www.i-juse.co.jp/statistics/jirei/>

■お問い合わせ先

(株)日科技研 数理事業部 パッケージサポート係 <http://www.i-juse.co.jp/statistics/support/contact.html>